



Title	アラビア語を母語とする日本語学習者における授受表現の習得研究
Author(s)	Abdelfattah, Hanem Ahmed
Citation	大阪大学, 2007, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58812
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	ABDELFATTAH HANEM AHMED
本籍（国籍）	
学位の種類	博士（言語文化学）
学位記番号	甲 第 7 6 号
学位授与年月日	平成19年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	アラビア語を母語とする日本語学習者における授受表現の習得研究
論文審査委員	主 査 准教授 眞 嶋 潤 子 副 査 教 授 高 階 美 行 副 査 教 授 田野村 忠 温 副 査 教 授 鈴 木 睦 副 査 教 授 竹 田 新

論文の内容要旨

研究の目的

本稿は、アラビア語を母語とする日本語学習者における日本語の授受表現の習得上の問題点を、エジプトの教育機関において実証的に調査し、目標言語地域でない JFL 環境において教育効果を上げるための提案をすることを目的とした研究である。

アラビア語の「授受動詞」は、日本語の「授受表現」と異なり、「あげる・くれる」に相当する動詞と、「もらう」に相当する動詞の2項対立である。また、アラビア語の授受動詞には、行為の恩恵の授受を表す「～てくれる、～てもらう、～てあげる」のような機能がなく、物の移動を表す機能しかない。つまり、アラビア語の授受動詞と日本語の「授受表現」の性質、機能が幾重にも異なるのであるが、先行研究では、アラビア語を母語とする日本語学習者が、「授受表現」を習得する際にどのような習得状況を見せるかということや、どのような問題を呈するかについて取り上げた研究が管見では見当たらない。本研究の目的は、今まで主たる対象者として取り上げられたことのないアラビア語を母語とする日本語学習者の「授受表現」の習得に関する問題点を明らかにし、教育的な提案をすることである。

論文の構成

本稿の第1部では、先行研究（第1章）を踏まえた後、アラビア語における「授受表現」の構造と機能（第2章）を詳述することによって、まず、アラビア語を母語とする日本語学習者の母語の影響の可能性を理解する背景を説明した。続く第3章では、今回の第2次・第3次調査で対象とした、エジプトにおける日本語教育の拠点である2大学の日本語教育実践について詳述し、それぞれの特徴を挙げ、差異を論じた。さらに第4章では、当該2機関で使われた日本語教材を、「授受表現」の扱いを軸にして分析した。

これらの分析から、今回調査したアラビア語母語話者の日本語学習者は、それぞれの機関のカリキュラムや使用教材にはかなりの違いがあることがわかった。つまり、本研究の対象者は異なった機関で日本語教育を受け、異なったカリキュラムを使用し、異なった教

師から指導を受けているが、エジプトの大学で正規の日本語教育を受けたこと（JFL環境）と、ある教科書（『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』）を主教材として使用した時期があること、母語がアラビア語であることの3つの点については共通しているということである。

ここで仮説として考えられることは、母語および環境以外の条件が異なると見られる本研究の対象者において、日本語の授受表現のテストをした場合に、共通の回答傾向や共通の誤用が出現するのではないかということである。対象者の回答に共通の傾向が見られた場合、母語の影響を示唆するものと解釈することが可能であろう。それに対し、2機関の対象者の誤用の傾向が異なっていた場合、指導方法や教材・カリキュラムなど、母語以外の要因による影響が大きいと推測することになる。

第2部の内容をまとめると次の通りになる。第5章では、まず3つの調査方法や調査項目などについて記述する。第6章では、調査の結果と、結果の意味を考察する。それを踏まえて、第7章で教育現場への提案をする。そして、最終章でこの実証研究について総括する。すなわち、第1部は調査の対象者、対象者の母語、教育機関に関する分析であり、その基盤の上にたつ第2部は調査の実証に関する論考となる。

調査方法

「授受表現」に関する項目としては、「あげる（やる）、くれる、もらう」（以下授受本動詞）、「受益表現」、「（て）さしあげる、（て）くださる、（て）いただく」（以下、待遇表現）といった言語形式に関わる問題だけでなく、「～てもらえない？・～てくれない？」や「～もらったら、どう？」などのように「授受表現」を使った「依頼」や「提案」などの言語の機能面に関わる問題など、数多くの項目が含まれる。先行研究にはアラビア語母語話者の日本語学習者を対象として取り上げた研究がないため、本研究では、上記で述べた「授受表現」に関わるこれらの全ての項目を取り上げ、習得状況や誤用を明らかにしようとした。

しかし、調査項目や問題数が多くなって、調査対象者への負担が大きくなりすぎること、調査の回答に悪影響が生じかねないと判断した。そのため、問題数や調査で取り上げる項目を減らし、3回に渡って調査を行った。それぞれの調査で取り上げた項目と各調査の目的は、以下のようにした。

第1次調査：「授受表現」「授受本動詞」、「受益表現」、「待遇表現」、「助詞の機能」の4つの要素に分け、誤用の多い順を分析し、それぞれの要素の習得状況と誤用を明らかにすること。

第2次調査：「受益表現」に関する誤用の傾向・誤用の種類、「授受表現」を使用した「依頼」の習得状況、「授受表現」を使用した「提案」、「使役+授受表現」の各項目の習得状況や誤用を明らかにすること。

第3次調査：「受益表現」を使用した「依頼」と「提案」を取り上げ、「提案」「依頼」の誤用傾向の再確認することと、「依頼」場面における「待遇表現」の使用状況を分析することと、「受益表現」に先行する「基本動詞」は、「受益表現」の非用率に影響を与えるかを分析すること。

研究方法

本研究では、3つの調査を行った。3つの調査共に、調査紙による筆記調査であり、対象

者は、アラビア語を母語とする日本語学習者である。第1次調査の際には、筆記調査の後、インタビューも行った。それぞれの調査の対象者、人数、問題作成について以下のようにまとめられる。

第1次調査

2003年4月に行った。第1次調査は、調査紙による筆記調査と、調査紙の採点後の対象者とのフォローアップ・インタビューによる方法である。

対象者

第1次調査の対象者は、カイロ大学文学部日本語日本文学科（以下カイロ大学日本語学科）の2年生から4年生までの学習者で、総人数は38名である。

調査紙の構成

第1次調査の調査紙では、調査の目的で前述した4つの要素「授受本動詞」「受益表現」「待遇表現」「助詞」を考慮し問題を作成した。

第2次調査

2005年3月～5月初旬に行った。調査紙による筆記調査である。

対象者

カイロ大学日本語学科ならびにアインシャムス大学外国語学部日本語学科（以下、アインシャムス大学日本語学科）の2年生～4年生の学習者である。学習者の総人数は73名（カイロ大学28名、アインシャムス大学45名）である。

調査紙の構成

調査紙は、第2次調査の目的で述べた「受益表現」と、「授受表現」を使用した「依頼」「提案」の機能に関する表現、「使役+授受表現」に考慮して作成した。採用したデータの抽出方法は談話完成法(Discourse Completion Task)である。対象者が自分自身の言葉を使い、談話を完成させるこの方法を使用することで、対象者自身の言葉（表現）を抽出することを目指した。

第3次調査

2006年3月～4月に行った。調査紙による筆記調査である。

対象者

カイロ大学日本語学科ならびにアインシャムス大学日本語学科の2年生～4年生の学習者である。対象者の総人数は57名（カイロ大学33名、アインシャムス大学24名）である。

調査紙の構成

調査紙は、「受益表現」、「授受表現」を使用した「依頼」「提案」の機能に関する問題、「依頼」における「待遇表現」の使用状況、「受益表現」に先行する「基本動詞」の種類を取り上げるよう考慮した。第3次調査で採用したデータの抽出方法は、第2次調査と同様に談話完成法である。

結果

第1次調査の対象者の回答を分析した結果、母語の影響があると考えられる誤用が多かった。また、第2次調査、第3次調査の対象者は、異なった2つの機関に属する学習者で

あり、異なったカリキュラムを使用し、異なった指導を受けている。しかし、両機関の対象者の回答を分析した結果、共通の誤用が見られた。両機関の学習者の共通点は、アラビア語が母語であることと、教科書の一部に同じもの（『みんなの日本語Ⅰ・Ⅱ』）を使用していることである。多くの誤用の原因には、アラビア語の干渉が推測される。以下に、各調査の結果をまとめる。

第1次調査の結果

「授受表現」の4つの要素の誤用順を調べた結果、全学年の誤用順は、「待遇表現」>「受益表現」>「授受本動詞」>「助詞」となっていることがわかった。各要素の誤用の仕方も、全学年では同じであり、「授受本動詞」、「受益表現」「待遇表現」では、混同が見られ、特に「(て) あげる」と「(て) くれる」との混同と、「(て) あげる」と「(て) もらう」との混同が目立った。

「あげる」と「くれる」との混同の原因は、「あげる」と「くれる」を区別しない対象者の母語の干渉によるものであると考えられる。アラビア語では、「あげる」文と、「もらう」文で使用される「助詞」に相当する表現が異なる。つまり、それぞれの文の格構造が異なるが、日本語では、「あげる」文においても「もらう」文においても、同じ助詞の「が + に + を」が使用されるため、対象者は、両文における「助詞」の働きまでも同じであると間違った解釈をしてしまい、「あげる」文においても、「もらう」文においても、「が」→「与え手」、「に」→「受け手」を表すと考えてしまうという誤用のメカニズムの一つを明らかにした。

「受益表現」の誤用としては、非用が目立った。アラビア語の授受動詞には、行為の恩恵の授受を描写する機能がなく、日本語の「母がご飯を作ってくれた」をアラビア語では、「母が私にご飯を作った」と述べ「私に」という表現を使うだけで、恩恵の意味が伝わるため、非用の原因もアラビア語、つまり母語の干渉によるものであると考えられる。

対象者の「助詞」問題の回答を分析した結果、対象者は、「助詞」を「が + に + を」の順でひとつのセットのように暗記し、格助詞の意味機能を十分把握していないことがわかった。

第2次調査の結果

第2次調査においても「受益表現」では、混同と非用が見られた。混同では、「～てあげる」と「～てくれる」との混同、「～てくれる」と「～てもらう」との混同が目立った。「～てあげる」と「～てくれる」との混同の原因と、非用の原因は第1次調査の結果で述べた通りである。「～てくれる」と「～てもらう」との混同には、「～てくれる」と、「～てもらう」の両動詞の類似性（話し手が「受け手」になれること）と、助詞の働きの違いへの理解や注意が足りないことの2つの原因が考えられる。

「授受表現」を使用した依頼では、「～てもらえない?」「～てくれない?」等の「授受表現」を使用せず、「～ていい?」「～しない?」「～しませんか?」による代用が見られ、特に「～ていい?」による代用が目立っている。

「～ていい?」による代用の原因は、アラビア語によるものであると考えられる。アラビア語には、「mumkin」という表現があり、「許可を受ける際」「許可を与える際」「依頼をする際」に使用できる。つまり、「mumkin」は「許可を受ける」「許可を与える」機能では、

日本語の「～ていい?」と同じ機能を果たす。しかし、「**mumkin**」が「依頼をする際」使用できるのに対し、日本語の依頼場面では「～ていい?」が使用できないことに気づいていない対象者が多く、「～ていい?」は「**mumkin**」と同様であると誤解をしている。

「日本語を教えてくれない」と回答すべき場面で、「(私に) 日本語を教えない」というように、「～しない?」や「～しませんか?」という言語形式を使用した「依頼」が観察された。この誤用には、対象者は「しない?」、「～しませんか?」を過剰使用していることが原因であると考えられるのだが、教材を分析することにより、対象者は、「～ませんか」が「依頼」では使えないことを見逃して、それを使用することにより、「ましようか」よりも否定形の「～ませんか」のほうが相手への配慮を表し、相手に選択権を与えることができるという面のみを記憶して運用していると解釈できる。

「提案」場面では、「～てもらったら?」のように「授受表現」を使用すべき場面では、「頼んで」、「頼める」といった表現の使用が見られた。これもアラビア語による影響であると考えられる。それは、アラビア語の「提案」は、「頼む」という動詞か、「使役形」かのどちらかにより表現されるからである。日本語の「日本人の友人に漢字を教えてもらったら」のような提案は、アラビア語では、直訳で「頼んで 友人に 教える あなたに 漢字」といった表現や、「友人に教えさせたら?」という表現になるからである。対象者の回答に「提案」で「頼む」を使用したことは、アラビア語と同じ「提案」表現を使用しようとしたと考えられる。

「使役+授受表現」や「使役」関連の誤用では、主に2種類の問題が見られた。「日本人の友人が妹を家に泊めてくれた」のような「受益表現」を使用すべきところで、「*妹を家に泊めさせた」のように「使役表現」を使用したものと、「研修を受けさせていたきたい」のように「使役+授受表現」を使用すべきところで「*研修を受けていたきたい」と、「受益表現」や「使役表現」のみを使用する誤りである。「使役+授受表現」と「受益表現」との間で混同を起こしている対象者が多いと考えられる。これらの誤用には、アラビア語の「使役」の意味が背景にあると考えられる。「受益表現」で、「使役」を使用した対象者は、日本語の「使役+授受表現」のつもりで、つまり「相手から恩恵を受けた」の意味で使用したと考えられる。「*日本人の友人が妹を家に泊めさせた」を「日本人の友人が妹を家に泊めさせてくれた」や「日本人の友人が妹を家に泊めてくれた」の意味で使用していると考えられる。また、「使役+授受表現」を使用すべき場面で、多くの対象者は、「授受表現」を非用し、「使役」のみ使用した。これも、アラビア語の干渉によるものと考えられる。上記の説明のとおり、「使役+授受表現」に相当するアラビア語の表現は、「使役形」で形成し、「受益表現」に相当する表現を使用しない。そのため、「受益表現」を使用すべき場面で、「使役」を使用した誤用にも、「使役+授受表現」を使用した誤用にも、アラビア語の母語の干渉が強く影響していると考えられる。

第3次調査の結果

第3次調査においても、「受益表現」の混同と非用が見られた。混同では、「～てあげる」と「～てもらう」との混同、「～てくれる」と「～てもらう」との混同が観察された。非用の原因も、「～てあげる」と「～てもらう」との混同、「～てくれる」と「～てもらう」との混同の原因も、第1次調査、第2次調査の結果で述べた通りである。

「受益表現」とそれに先行する「基本動詞」の種類が「受益表現」の非用率と関係があ

るかを分析した結果、荒巻（2003）の考察を支持する結果が得られ、「連れて行く」、「来る」といった対象（目的語）がない「基本動詞」が使用された問題の非用率が高く、一方、「買う」「紹介する」「教える」「直す」といった対象（目的語）を持つ「基本動詞」の非用率が相対的に低かった。対象のある、「教える」「紹介する」「直す」「基本動詞」の方では、「何かを教えてもらう」や、「人を紹介してもらう」、「間違いを直してもらう」「何かを買ってもらう」のように、恩恵を受ける前と恩恵を受けた後に何らかの変化があり、受け手には目に見えるような具体的な恩恵があるため、恩恵を受けたという意識が相対的に高いのに対し、対象のない「連れて行く」や「来る」では、目に見える恩恵や変化が見られないため、対象者には恩恵の授受の意識が弱く、非用をすると考えられる。

「授受表現」を使用した「依頼」場面の問題では、第2次調査と同様に、「～ていい？」による代用が目立った。その他には、「～てください」の代用による「依頼」が観察された。

「依頼」場面で「待遇表現」の使用状況を分析した結果、対象者は「依頼」場面で「待遇表現」の使用・不使用を依頼の種類により、決定することがわかった。「500円を貸してくれない？」のような場面では、「依頼」の全負担は依頼相手にあり、利益が依頼者に生じる「無交換依頼」では、「待遇表現」を使用し、状況を和らげようとする。しかし、「アラビア語を教えてあげるから、日本語を教えてくれない？」のような、「依頼」の負担も利益も依頼者と依頼相手の両者にある場合は、「待遇表現」を使用しない。このように相手の負担が一方的に多い場合に限って、それを和らげるために丁寧な表現（「待遇表現」）を使用するというコミュニケーション上のストラテジーを「交換依頼ストラテジー」と名づけた。

結論

本研究では、異なった2つの教育機関の日本語学習者を対象にし、「授受表現」の習得状況を分析した結果、両機関の対象者の回答には共通の誤用が観察されることがわかった。従来の研究では（大塚 1995、岡田 1996、1997）、「～てくれる」「～てもらう」の混同には、「～（て）くれる」自体の難しさが原因であると主張されていたが、本研究の対象者の回答を分析した結果、アラビア語母語話者の「～てくれる」「～てもらう」の混同には、主に「もらう」の習得の困難さと、母語との比較から、格構造の類似性が原因であると主張した。従って、アラビア語母語話者の「～てもらう」「～てくれる」の混同をなくすため、「もらう」と、「もらう」文で使用される助詞への別個の指導が必要であることが提案できる。

また、アラビア語母語話者の独特な誤用と言えるものも指摘できた。特に、依頼における「～ていい？」による代用や、「提案」における「使役」による代用が挙げられる。これらの誤用はアラビア語の「依頼」「提案」のそれぞれの表現と深く関わることがわかった。これらの誤用の産出を防ぐため、学習者に母語の「依頼」「提案」表現と、目標言語の日本語の「依頼」「提案」の違いに気づかせることが重要であると考えられる。これは、「依頼」「提案」の指導についてのみ言えることではなく、「授受表現」の誤用には、母語の干渉が大いに関わっていることから、アラビア語母語話者の日本語学習者には、「授受表現」を指導する際、母語へ配慮は不可欠であることを指摘した。

今後の課題

本研究は、調査方法において実施上の制約から、調査紙の設問数や調査対象者の人数に限りがあったため、結論の解釈には制限がつく。しかし、日本語教育学・第二言語習得研

究の分野において、JFL 環境のアラビア語母語話者の「授受表現」の実証研究として先行研究にはなかった調査結果を提示することができたと考えている。

今回の結論を新たな仮説として、それを学習者の発話データを基にして検証することが必要である。また、今回は「授受表現」にまつわる言語形式の操作面と、「恩恵」を表すことや「待遇」ということに関する日本語とアラビア語の発想面の違いが指摘できたので、それを検証するような研究も必要であろう。また、本稿で提案した指導方法の効果を検証する研究も必要だと考えている。

論文審査の結果の要旨

1 本研究の位置づけ

本研究は、アラビア語を母語とする学習者が外国語としての日本語（JFL）を学ぶ状況において、日本語の授受表現に絞って習得の困難さとその原因に迫り、教育的提案を行おうとしたものである。日本語教育学における第二言語習得研究の母語別実証研究として位置づけられ、海外における日本語教育の発展に寄与することを目指した基礎研究である。これまでなされてこなかったアラビア語を母語とした日本語学習者を対象とした実証研究であり、今後の当地での日本語教育研究への先鞭をつけるべき研究として、その意義は大きい。

2 論文の構成

本稿は、大きく2部に分かれ、まず第1部では授受表現に関する先行研究を日本語学、日本語教育学、第二言語習得研究の分野から論じた後、学習者の母語であるアラビア語と目標言語である日本語との対照を行っている。その上で、今回調査対象としたエジプトの2つの高等教育機関の日本語教育のカリキュラム、教材の詳細を記述している。これらの先行研究、対照研究、教育現場の記述をふまえて、第2部では3次にわたって行われた調査研究の方法と結果の考察がなされている。

第1部の記述について、審査員からは特に教育現場の記述がそこまで詳細でなくてもよかったというコメントもあったが、第2部の調査対象者をよりよく理解するため、また日本で必ずしもよく知られていない教育機関の内容について、日本人読者を想定しているための説明としてなされたものであり、趣旨は理解できる。

3 調査方法

第1次調査はカイロ大学における、第2次調査はカイロ大学とアインシャムス大学における調査である。第2次調査のデータ収集方法の問題点（2機関での収集法が同じでなかったこと）を克服すべく第3次調査では再度カイロ大学とアインシャムス大学で、調査を行っている。データ収集方法としては、談話完成法を使った筆記調査と、被調査者へのフォローアップ・インタビュー

一を行っている。もともとそれほど多くないエジプトの日本語学習者を対象とした研究で、しかも2つの機関におけるデータ収集は容易なことではなかったはずだが、うまく協力を得て調査している。ただ、調査項目の数については、多すぎると被調査者の負担になりきちんと回答してもらえない可能性があり、少なすぎると各文法項目において信頼性の高い回答が得られないので、その妥協点が難しい。本研究では、項目がやや少なかったというきらいがある。また調査紙そのものも改良の余地が認められるという指摘をした。

4 結果考察

3回にわたる調査の結果、異なった教育機関であっても学習者のデータからは、授受表現に関して共通の問題点が観察されることがわかった。授受表現の中で、どのような項目に問題が多いかを調べ、それぞれの原因に迫っている。中でも授受動詞「あげる」「くれる」に絡んだ混同が多く観察され、その理由を多面的に解明しようとしている。特にアラビア語との比較から推論したところがユニークで、アラビア語を母語とする筆者ならではの洞察に基づき、データを使って論じている。

学習者のコミュニケーション・ストラテジーとして「あげる」を多用していることがインタビューでわかったこと、文構造の類似性から「あげる」「もらう」を識別しにくいこと、またアラビア語の "mumkin" という表現の影響で依頼場面において日本語の受益表現がうまく使えないことなど、これまでにない指摘がなされている。さらに、本論で「交換依頼ストラテジー」と名付けられた待遇表現の使用ルールは、今後アラビア語話者の文化背景と共に探求されるべきものであると考えられる。また審査員からは、待遇表現がアラビア語では日本語と異なる装置で働くことが興味深いので、今後受益表現に限らず使役表現等にも広げて研究してはどうかというアドバイスがなされた。

限られたデータであるとは言え、日本語の受益表現を習得するにあたり、アラビア語母語話者特有の困難さが重層的に存在することが論じられており、本稿の考察は日本語教育学への貢献として認められる点で審査委員会は一一致した。

5 総評

データ収集方法や、データ数に限界や問題が残るとはいえ、アラビア語母語話者を対象とした初の本格的実証研究であることだけにとどまらず、今後の研究の方向性を多方面で示唆し、本研究が外国語としての日本語教育の習得研究に与える意義は大きく、日本語教育の発展に寄与することが見込まれるので博士論文として質量ともにふさわしいと認められる。